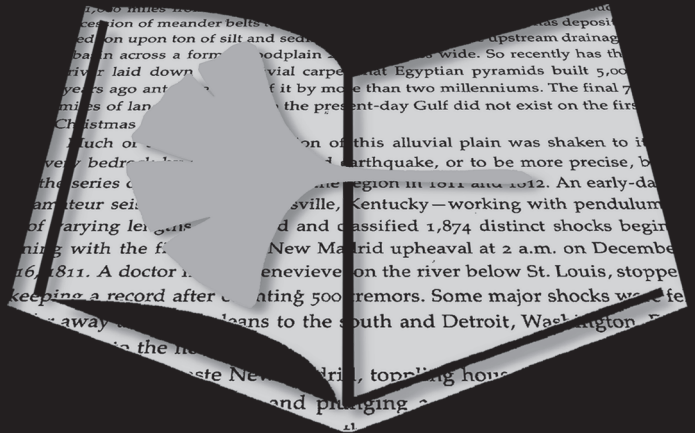


「東大」

英文解釈の すべて

鬼塚幹彦 著
Mikihiko Onizuka



研究社

はしがき

本書は、拙著『「東大」英語のすべて』（1999年・研究社）の「英文解釈」の項をさらに深めたものです。執筆の理念も、好評で迎えられた前書を踏襲しました。

英文解釈にまず必要なことは英文構造の正しい理解です。本書を書くにあたって、文構造を見抜く力が無理なく習得できることを念頭に置きました。なお、本書に収録されている英文は、過去100年以上にわたる東京大学の入試問題から厳選しています。本書で学んだあとに英文を読むと、英文が格段に読みやすくなっていることに気づくはずですよ。

語彙力は英文の中で身につけていくのが理想です。本書では、個々の単語の本質的な意味や効果的な学習法を随所で可能な限り示し、単語力も身につくように配慮しています。語注などもおろそかにせず使いこなしてください。

第1章「文頭のパターン」の冒頭で述べたように、本書はリスニング力の向上まで視野に入れています。私はリスニング理論と英文読解の理論は基本的に同じであるべきだと考えています。読んで理解できない英語を聴いてわかるはずはなく、当然ながら話すことも書くこともできません。したがって、本書によって英語力全体の向上を図ることができます。

この英文解釈の指南書を幅広い読者に手にしてもらい、解釈力を土台とした英語力の向上を実感していただければ本当にうれしく思います。

※

最後になりましたが、研究社編集部の佐藤陽二氏には本作りのすべての過程で貴重な援助をいただきました。そして、本書が出版できるのは筆者が今までに接してきた実に多くの学生たちのおかげです。ありがとうございます。

2016年 秋
鬼塚 幹彦

本書の使い方

- * 前から順番に読み進むのがよいが、自分にとって必要だと思う項目を先に読んでもかまわない。その場合も、「文頭のパターン」から始まり、英文全体の構造が自然に修得できるように配列されていることを頭に入れておくこと。
- * 各章の章末に「○章のポイント」を設けた。ここではその章で学んだことが短くまとめられているので、述べられていることが理解できない、あるいは自信が持てない場合は、→のあとに示される問題番号に戻って確認すると、その章で学んだ内容を確認して全体像をつかむことができる。
- * 第1講の例題 → 第1講の演習 → 第2講の例題...と、構成のとおりに進めるのがよいが、演習には比較的難しい英文を選んでいるので、先に例題だけに取り組むことで、まずは本書の全体像をつかむという方法をとってもよい。
- * 例題は1問ごとに解説と訳がつく。一方、演習は問題を先に出し、解説と訳はあとでまとめて提示している。演習は1問ごとにその問題の解説を見ても、先にすべての問題を解いてからまとめて解説を見てもかまわない。
- * 相互参照をできる限り示している。最初に読むときは未読の参照箇所は無視してもよいが、2回目以降は、できるだけ参照してさらに理解を深めてもらいたい。相互参照は基本的に問題番号の形で示され、講と例題と演習は通し番号になっている。
- * 相互参照にあたると、その項目の理解がさらに深まるだけでなく、単語力の大幅な増進も図れる。索引とともにぜひ相互参照をフル活用してもらいたい。
- * 巻末の「注意すべき4つの前置詞」は、最初に目を通しておき、常に参照するのが有益である。

目 次

はしがき	iii
本書の使い方	iv

第1章 文頭のパターン

第1章	1
-----	---

第1講 S sv V	1
第2講 文頭の Ving と Ved	3
第3講 文頭の形容詞と名詞	7
第4講 文頭前置詞	9
第5講 文頭の接続詞	12
第6講 文頭の To- 不定詞	17
第7講 文頭の It	21
第8講 There で始まる文	28
第9講 文頭の倒置	32
第1章のポイント	41

第2章 Sの交代

第2章	43
-----	----

第10講 Ving、to V と付帯状況の意味上の主語	43
第11講 第5文型の考え方	50
第12講 第5文型の代表的動詞	53
第13講 使役動詞	59
第14講 知覚動詞	64
第2章のポイント	68

第3章 名詞修飾の型

第3章	69
-----	----

第15講 名詞+形容詞	69
-------------	----

目 次

第 16 講	名詞＋前置詞句	75
第 17 講	名詞＋関係節	80
第 18 講	関係副詞	91
第 3 章のポイント		97
<hr/>		
第 4 章	述語動詞のあとの名詞	99
<hr/>		
第 19 講	動詞＋名詞＋名詞	99
第 20 講	動詞 . . . 前置詞句	103
第 4 章のポイント		107
<hr/>		
第 5 章	形容詞と副詞	108
<hr/>		
第 21 講	文における形容詞	108
第 22 講	文における副詞	113
第 5 章のポイント		121
<hr/>		
第 6 章	接続詞	122
<hr/>		
第 23 講	等位接続詞	122
第 24 講	従位接続詞	128
第 6 章のポイント		133
<hr/>		
第 7 章	その他の重要な英文の型	134
<hr/>		
第 25 講	the way SV	134
第 26 講	S be . . . to V	136
第 27 講	S be to V	140
第 28 講	to V のポイント	144
第 29 講	省略	150
第 30 講	挿入	157
第 7 章のポイント		162

第8章 否定	163
第31講 否定語のない否定	163
第32講 重要な否定表現	168
第8章のポイント.....	175
第9章 比較	176
第33講 比較の基本	176
第34講 比較の重要表現	181
第9章のポイント.....	194
第10章 進行形と完了形	195
第35講 進行形	195
第36講 完了形の本質	200
第10章のポイント	205
第11章 助動詞と仮定法	206
第37講 助動詞	206
第38講 仮定法	215
第11章のポイント	221
第12章 正しい解釈のための重要語	222
第39講 a と the と one	222
第40講 some/ any と -ever	229
第41講 that	234
第42講 what と that	244
第43講 if と whether.....	248
第44講 how.....	254
第45講 as.....	258
第46講 so と such	268

目 次

第 47 講 all	273
第 48 講 much	277
第 12 章のポイント	280
〈付 録〉 注意すべき 4 つの前置詞	282
索 引	284

第 1 章

文頭のパターン

英文の理解は、いわば左から右へ英文の流れを予想するゲームです。文頭に接して英文の全体像が予想できるようになれば、読解力はもちろん、リスニング力の向上にも寄与します。本章では、**文頭のパターン**から英文の全体像を予想する訓練をします。それができれば、英語を速く正確に読む力とともに、正確に聞き取る力も同時に身につけることができます。

第 1 講 S sv V

英文の基本構造は SV、すなわち、主語+文の動詞です。ただし、SV と表記はしても、実際には S が 1 つだけではなく、S が 2 つ続くように思われる場合があるので、本講ではその型を中心に考えます。以後、文の動詞を、品詞の「動詞」と区別する必要があるときには「述語動詞」と呼び分けます。

例題 1

Our relation to the books we come across in our lives is a mysterious one. (1984)

語注

relation to ~ 「~に対する関係」/ come across ~ 「~に (偶然) 出会う」/ mysterious 「謎めいた」/ one 「もの」ここでは a relation 「関係」のこと。one ÷ a + 名詞 (→ 例題 174)。

解説

Our relation to the books we come across . . . is 「私たちが . . . 出会う本との関係は」は、S (Our relation . . . books) s (we) v (come) V (is) の型です。この型は、「(s が v する) S は V する」と解釈するのが原則です。ポイントは助詞の「が」→「は」という順番です。

訳

私たちが人生で出会う本との関係は不思議なものだ。

冒頭が S sv... と同じ型でも、あとに文頭の S に対応する V が登場しないことがあります。OSV と倒置されて、名詞+名詞+動詞になる場合です。

Terror he can know, and perhaps he knows it frequently. (1979)

「彼(=小鳥)は恐怖を知りえるし、頻繁にそれを知っているのかもしれない」

Terror he can know は SVO が倒置して OSV になった型です。なお、O は述語動詞の目的語を表します。



演習 1

People are liable to confuse leisure with pleasure, and pleasure with idleness. They show little discretion in the use of their increasing freedom from work. Often the best use the working man can make of his spare time is to spend his money in it. (1973)

語注

be liable to V 「Vしがちである」 / confuse leisure with pleasure, and pleasure with idleness 「余暇と快楽、快楽と無為とを混同する」 confuse A with B は「AをBと混同する」で、ここは confuse A₁ with B₁, A₂ with B₂ 「A₁をB₁と、A₂をB₂と混同する」の型。 / little 「ほとんど...ない」(→例題125) / discretion 「思慮分別」 / his spare time 「彼の暇な時間」

演習 1 の解説

最後の文の the best use the working man can make of... is 「働く人が...からできる最高の利用は...だ」は S sv V 「s が v する S は V だ」の型。make the best use of ~ 「~を最大限に利用する」という表現法を復元できるかどうかのポイント。なお、the best ~ の最上級には「せいぜい」の含みがある(→例題147)。

訳

人々は余暇と快楽を、快楽と無為とを混同しがちである。彼らはますます増え

ている仕事がない状態の使用において、ほとんど思慮分別を示さない。しばしば、働く人の余暇の最良の利用方法は、せいぜいそれにお金を使うことなのだ。

第2講 文頭の Ving と Ved

初級者は Ving を見境なく「V すること」と解釈しがちです。Ving が動名詞の場合は「V すること」ですが、現在分詞を「V すること」と解釈するのは致命的な間違いです。本講では動名詞と現在分詞を見分ける方法を考えます。

例題 2

Learning to lie is an important part of growing up. (2009)

語注

learn to V 「V することを学ぶ」→「V できるようになる」/ an important part of ~ 「～の重要な一部」/ grow up 「大人になる、成長する」

解説

Learning ~ (S) is (V) ... (C) 「～を学ぶことは [が] ... だ」という構造で、is の前までが主語です。C は補語を表します。**主語は必ず名詞・名詞句・名詞節の名詞相当語句**です。したがって、主語になる Ving は動名詞で「V すること」と解釈します。なお、名詞句の「句」は2語以上の語からなる意味のかたまりのことです。名詞節の節は SV を含む意味のかたまりのことです。

訳

嘘がつけるようになることは、大人になることの重要な一部だ。

述語動詞が are ではなく is であることに注意しましょう。動名詞は単数扱いで、そこから、is / was / -s (=3 単現の s) が Ving を主語だと確定する目印になるからです。Ving が動名詞になって「～すること」と解釈できるのは、主語のほかに目的語や補語の場合があります。次は動名詞が目的語になっている例です。

In fact, he is thinking of **selling his big villa and moving to Italy.** (1960)
「実際、彼は郊外にある自分の大邸宅を売って、イタリアに引っ越そうかと思っている」

例題 3

Clearing his throat, the first guard stares at me intently. (2003)

語注

clear *one's* throat 「咳払いをする」 / stare at ~ 「~をじろじろ見る」 / intently 「熱心に」

解説

Clearing his throat, the first guard stares 「咳払いをして、最初の衛兵がじろじろ見る」は Ving (Clearing), S (the first guard) V (stares) の型です。「咳払いをすること」と解釈するのは誤りです。もし Clearing を主語に設定していても、カンマで区切られて、対応する述語動詞がないことから、Clearing が現在分詞だと考えて、「咳払いをして」と解釈します。

訳

最初の衛兵は咳払いをして、私を熱心にじろじろ見る。

なお、分詞には Ving の現在分詞と Ved の過去分詞の2つがあります。次に、文頭に過去分詞がくる英文について考えます。

例題 4

Given the question of how to move around in the dark, what solutions might an engineer consider? (2006)

語注

the question of ~ 「~という質問」 / how to V 「どのようにVすべきかということ、Vする方法」(→ 例題 198) / what solutions 「どんな解決法」 この what は疑問形容詞(→ 例題 190)。

解説

Given . . . , . . . might an engineer consider . . . 「. . . を与えられると、エンジニアなら . . . を考えるのだろうか」は過去分詞 (Given), S (an engineer) V (might consider) の型です。この場合は、文頭の過去分詞の前に現在分詞の Being

を補い、例題3と同じように文頭の現在分詞の型として考えます。an engineer is given the question of ... 「エンジニアは ... という質問を与えられる」を踏まえて解釈します。文末の?から疑問文だとわかります。カンマのあとの文で助動詞 might が主語 an engineer の前にあるのは疑問文だからです。

ちなみに、Given (that) SV は、「SV を与えられれば」から「SV を所与のものとするば」→「SV を考慮 [仮定] すれば」という意味に派生した定型表現です。「所与」が示すように、本来は論文調です。

訳

暗闇でどのように動き回るべきかという質問を投げかけられたら、エンジニアならどのような解決法を考えるのだろうか。

例題3と4の型は一般に分詞構文と呼ばれます。主な型としては分詞, SV. と SV, 分詞. の2パターンです。本講では前者を扱い、後者は第21講で考えます。

分詞構文では必ず主語を補って解釈してください。例題3の文には the first guard は一度しか出てきませんが、解釈するときには「**最初の衛兵は** ...」のように主語を補います。この作業を繰り返すことで、分詞構文が正確に理解できるようになります。そうやって分詞構文に慣れてきたら、「...て」「...ら」「...と」といった助詞でつないで解釈します。

分詞構文の本質は、意味を文脈に委ねて文と文をつなぐことにあります。たとえば、例題3の Clearing his throat は「咳払いをして」、例題4の Given ... は「... が与えられると」といった具合です。



演習 2

Indeed, calling our intuitive predictions unreliable because they fail with gambling devices is unreasonable. (2002)

語注

indeed 「実際」 / call our intuitive predictions unreliable 「直感的な予言を信頼できないと呼ぶ」 call O C 「O を C と呼ぶ」で C が形容詞 unreliable の型 (→ 例題 81)。 / intuitive prediction 「直感的な予言」 / unreliable 「信頼できない」 / with ~ 「～に関して」 / unreasonable 「不合理な」

演習3

First proposed early in the 20th century, the idea of obtaining resources from asteroids continues to attract attention. The basic notion is to get material from near-earth asteroids, that is, those having orbits that come close to our planet. (2010)

語注

the idea of ~ 「～という考え」 of = 「という」 (→ 例題4) / resources 「資源」 通例複数形。 / asteroid 「小惑星」 / that is 「すなわち」 前の内容を言い換えるつなぎの表現 (→ 第41講冒頭)。 / those having は名詞＋現在分詞で、名詞修飾の型 (→ 例題54)。ここでは those は asteroids のこと。 / orbits that come close 「近くにやって来る軌道」 名詞＋that V の型で、that は関係代名詞 (→ 例題180)。

演習2の解説

calling ... is unreasonable 「... を呼ぶことは不合理だ」は S (calling ...) V (is) C (unreasonable) の型。主語の calling は動名詞で「(... を信頼できない) 呼ぶこと」と解釈する。主語が単数であることを示す is が大きなヒントになる。

訳

実際、それが賭博の装置に関してうまくいかないから直感的な予言を信頼できないと呼ぶことは不合理だ。

演習3の解説

First 「まず、最初に」は副詞なので、最初に出てくる文の要素は proposed となり、文頭の過去分詞の型として考える。Being proposed ... として、the idea was proposed ... を踏まえる。なお、訳では、まず分詞の主語を補って、主節の主語は省略した。分詞構文では、必ず分詞の主語を補って考えること。

訳

小惑星から資源を獲得するという考えは20世紀初期にまず提案され、今もなお注目を集めている。基本的な考え方は、地球に近い小惑星、すなわち、地球に近づいてくる軌道を有する惑星から資源を得ることだ。

第3講 文頭の形容詞と名詞

形容詞が置かれる場所は2つあります。1つは動詞のあと、もう1つは名詞の前後です。I am **beautiful**. では be 動詞 am のあと、She is a **beautiful** girl. は名詞 girl の前にきています。これ以外の位置に形容詞がある場合は、この本来の位置に戻して考えます。本講では、形容詞を本来の位置に戻すための手順を見ます。

例題 5

Alive, the elephant was worth at least a hundred pounds; dead, he would only be worth the value of his tusks, five pounds possibly. (1956)

語注

worth ~ 「～の価値がある」(→ 例題 52) / at least 「少なくとも～、～以上」 / would 「(もし... なら)～だろう」(→ 第37講) / tusk 「牙」 / possibly 「ひょっとすると、できるかぎり、せいぜい」

解説

Alive, the elephant was ... 「生きている状態で、象は... だった」は形容詞, SV. の型です。この場合、形容詞の前に being を補い Being alive ... として、文頭に現在分詞にくる場合と同じように解釈します。主節の主語の the elephant を補うと、The elephant was alive となります。次の **dead, he would only be** も形容詞, SV. の型なので、being を補って being dead にして考えます。

訳

象は生きていれば百ポンド以上の価値があるが、死ぬとせいぜい牙の価値である5ポンドの価値しかないだろう。

形容詞は名詞を修飾するのが基本です。例題5でも、Alive にいちばん近い名詞 the elephant を修飾すると考えて、「生きている」→ 何が? → 「象が」という流れで考えてもいいでしょう。

なお、文頭の名詞がカンマで区切られて、主節と独立している場合も、形容詞と同じように Being を補って考えます。

The daughter of a well-known doctor, she had gone to Clayfield College and been clever and popular. (2013)

「(彼女は) 有名な医者の娘で、彼女はクレイフィールド大学へ行って、聡明で人気があった」

Being を補って、**Being** the daughter of . . . , SV の型にして考えます。



次の演習4は、「母は娘の寝室を訪れるが、娘はベッドで眠ったふりをしている。娘の父(=母の夫)が死亡してから1週間しか経っていない」という状況です。

演習4

'Your father never loved me. You should not have had to know this. He did not love me.' She spoke each word with a terrible clarity, as if trying to burn it into my brain. I squeezed my eyes tight. Rigid in my bed, I waited for my mother to leave the room, wondering if I would get over all this with time. (2000)

語注

clarity 「明晰さ」 / as if . . . 「まるで . . . のように」 (→ 例題 207) / squeeze 「(ぎゅっと) 絞る [閉める]」 / rigid 「硬直している」 / wait for ~ to do 「~が . . . するのを (今か今かと) 待つ」 / wonder if SV 「SV かどうかを知りたいと思う」 (→ 例題 193)

演習4の解説

形容詞 (Rigid), S (I) V (waited) . . . に Being を補い **Being rigid . . .** , にして、I was rigid in my bed 「私はベッドで硬直していた」という意味を踏まえて解釈する。

訳

「あなたのお父さんは私のことを決して愛していなかったわ。あなたはこのことを知るべきではなかったのだけどね。彼は私のことを愛していなかったのよ」彼女は、まるでそれを私の脳に押しつけようとしているかのように、恐るべき明晰さでひと言ずつ話した。私は自分のベッドで硬直して、時間が経つとこれらのことをすべて乗り越えられるのだろうかと思いながら、母が部屋を去るのを待った。